

短報

Webによるサービス・ラーニング(総合科目Ⅲ 生活科学論) の初年度の科目の進め方と評価

田代 順子¹⁾ 瀬戸山陽子²⁾ 平林 優子³⁾ 長松 康子¹⁾ 大森 純子⁴⁾

Process and Evaluation of the First Year Web-based Service Learning Course

Junko TASHIRO, RN, PHN, PhD¹⁾ Yoko SETOYAMA, RN, PHN, MS²⁾
Yuko HIRABAYASHI, RN, PHN, MS³⁾ Yasuko NAGAMATSU, RN, PHN, MPH¹⁾
Junko OMORI, RN, PHN, DNSc⁴⁾

[Abstract]

This article describes our first year's educational activity of a new course: "Integrated learning—Ⅲ: Science for Daily Living", using web-based service-learning that commenced April 2009 for freshmen and sophomore students. It was developed through action research in 2002. The course aims were: (1) introduce freshmen to basic understanding of volunteering in health and community; (2) support learning through volunteer activity experiences; and (3) strengthen awareness of social responsibility as a community member. While 34 students registered, only 18 (53%) completed this course. The steps of learning included: e-learning on health volunteers and sending learning-logs; participating in volunteers activities; sending a daily log about volunteer activities and meeting with faculty. The total of 130 student-outcome daily logs were submitted. Students' evaluated their satisfaction of this subject on average as 8.5 point with 10-point scale (1 *lowest*, 10 *highest*). Students evaluated the subject using 4-point Likert scale (4, *highest*). The highly items evaluated were: obtained "new perspectives" (M=3.92), and "learning motivation" (M=3.92). The items evaluated poorly were: "use of educational resource" (M=3.15) and "teaching methods" (Mean=3.33). Although students completing the course were satisfied, approximately half of registered students did not complete the course. Further improvement of this course is needed in order to increase the completion rate and to enable and support students becoming good citizen working for their own community.

[Key words] service-learning, e-learning, reflective-learning

[要旨]

2009年4月から、ボランティア活動から学ぶサービス・ラーニング科目を「総合科目Ⅲ 生活科学論」としてWebを使用して学部1・2年生に開講した。この科目は2002年より、ボランティア活動をしている学生の学習支援として研究的に開発された。科目のねらいは、Web基盤の学習プログラムで学生がボランティアに参加するための基礎知識を得て活動に参加し、参加した活動経験を振り返り、リフレクション記録を作成することで、社会の一員としての自覚と社会貢献性の重要性の学びを支援することであった。本稿では本科目での初年度の教育実践を報告する。

1) 聖路加看護大学 国際看護学 St. Luke's College of Nursing, Global Health Nursing
2) 聖路加看護大学大学院 博士課程 看護情報学 St. Luke's College of Nursing, Graduate School, Doctoral Program, Nursing Informatics
3) 聖路加看護大学 小児看護学 St. Luke's College of Nursing, Child Nursing
4) 聖路加看護大学 地域看護学 St. Luke's College of Nursing, Community Nursing

初年度、34名の学生が履修届を提出し、最終的には18名の学生が単位を修得した。学生の学習過程は、Webでのボランティア理解の後、病院の成人病棟や小児病棟、あるいは在宅、地域、海外で実際のボランティア活動をし、デイリーログを作成し、報告した。活動のデイリーログは総計130ログが提出され、ログからは多くの学生の学びが報告された。科目評価では、単位修得した学生の満足度は10点満点の8.5点で、高い評点を示していた。12項目の4点リッカートでの評価では、新たな知見(平均3.92)、学習意欲(平均3.92)、さらなる勉強(平均3.62)の項目で高く、この高い項目から学生の能動的な学習ができることを評価していることが読み取れた。他方、教材活用(平均3.15)、授業方法(平均3.33)の評価は低く、学生自身の学習不足との自己評価と教員の科目の進め方の工夫の必要性が示された。単位修得に至った学生は約半数であり、どの学生にとっても科目選択をし、継続していくことは容易な科目ではないことが考えられた。履修した学生の継続の支援は課題であり、継続しにくい要因を探索し、今後、より多くの学生が地域のボランティア活動に参加し、ボランティア経験からの学びを豊かにし、社会の一員としての責任を学ぶことができるように学習支援プログラムを改善してゆく。

【キーワードズ】 サービス・ラーニング、e-ラーニング、リフレクティブ・ラーニング

I. はじめに

平成21年(2009年)4月から、学部の教養科目の総合科目の一つとして、ボランティア活動を通して社会の一員(市民)としての責任を学ぶサービス・ラーニングをWebで進める科目を開講した。この科目は、著者ら(田代他, 2009a)が『看護学でのサービス・ラーニングを応用した都市型・社会参加型カリキュラム開発と評価』¹⁾と題した研究の成果としてカリキュラム化した。この科目のユニークな点は、これまで研究してきたサービス・ラーニングと情報工学が発展し、教育にWeb活用の可能性が広がってきている、e-ラーニングを組み合わせ、大学の教養教育にとり入れた点であった。このe-サービス・ラーニングのカリキュラム開発の経過は、2009年に報告した(田代他, 2009b)²⁾。

本科目は、1年生・2年生を対象としているが、開講初年度において履修生のほとんどが新入生であり、ボランティア経験が初めての学生も少なくなく、加えて、Webを使った科目は初めての科目でもあった。新しく開講した科目であったため、履修生にとっても教員にとっても、4月のガイダンスから翌2010年の1月の最終の対面クラスまで、コース計画はあったものの、すべて手探りで探索的に進めてきた。初年度の教育実践を振り返ることは、大学でのサービス・ラーニングを改善し、ひいては大学の社会貢献性を強化することに繋がると考える。本教育実践報告では、科目の理論的基盤としてのサービス・ラーニングとリフレクション(振り返り)、科目概要とその進め方、学生の履修状況と、学習状況と学習成果、教員の指導体制と実績を報告し、今後の科目の課題と改善策を考察する。

II. 科目の理論的基盤：サービス・ラーニングとリフレクティブ・ラーニング

サービス・ラーニングとは、社会的ニーズに沿ったサービスに参加することでなされる経験学習であり、コースの授業内容を深め、市民としての責任感あるいは社会的価値を高める教育カリキュラムである(松谷ら, 2004)³⁾。経験からの学びであることから、学生のリフレクション・スキルの開発は重要な要素である。リフレクション・スキルの開発に関して、Driscoll(2007)⁴⁾が提唱しているリフレクティブ・サイクルを科目の理論的基盤としている。

リフレクティブ・サイクルには、ボランティア等で、1) 実践・経験し、2) 何が起こったかを記述、3) 自分の観点からの出来事の焦点化、4) そのことの更なる考察(分析)、4) 自分にとっての新たな発見や学びの体験、5) 今後さらにどのようにしていくかの行動計画、6) 再実践、の過程を含み、1) 自覚、2) 記述力、3) 批判的分析力、4) 統合力、5) 評価力、の側面を自己教育で養っていくという理論を基盤としている。このリフレクティブ・サイクルを図1に示す。

III. 科目概要と進め方

総合科目Ⅲ、生活科学論の目標は、「キャンパスを出て地域社会でボランティア活動を通じて地域社会の人々の生活と自らも社会の一員(市民)としての責任を学ぶこと」であった。この科目の主要な内容は、コミュニティサービスの重要性、ボランティア活動の理論と技術、ボランティア活動の振り返り(リフレクション)であった。この科目の方法は、サービス・ラーニングであり、Webラーニングであった。

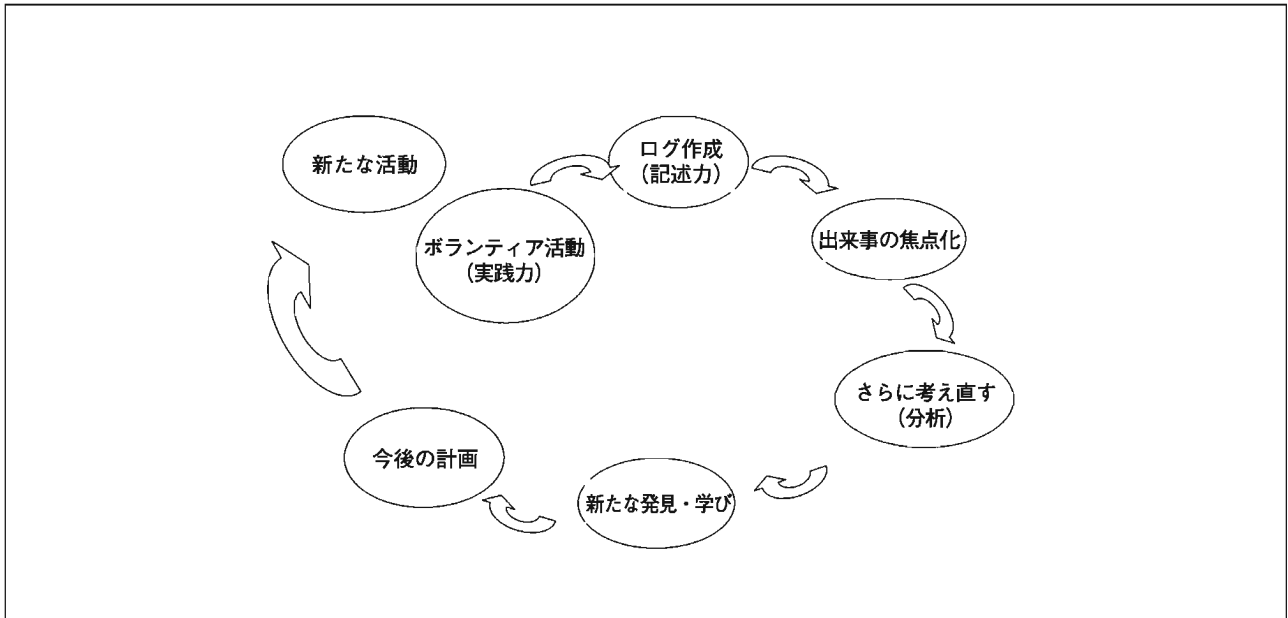


図1 実践から学ぶ『リフレクティブ・サイクル』
(Driscoll (2007) リフレクティブサイクルを著者が作図した)

進め方は、1) 履修手続き、2) ボランティア学習と Web 学習の準備、そして、3) ボランティア活動からの学習、4) 全体ミーティングでのボランティア経験の共有と振り返り、5) 評価、と段階的に進めた。

1. 履修手続き

履修者希望者への全体のガイダンスを済ませた後、その場で履修する者は ID を登録した。ID 登録完了の連絡を履修生全員にメールで知らせ、学生は Web でのボランティア学習を開始した。

2. ボランティア学習と Web 学習の準備

Web 上のヘルス・ボランティアについて Web 上の学習サイトでボランティアについて学び、Web でダイアリーログの使い方を学び、学習ログを作成し、教員グループに Web で送付した。Web 上のボランティア学習の内容は、(1) ボランティアとは？、(2) ボランティアの基本姿勢、(3) コミュニケーションについて、(4) ヘルス・ボランティアインタビュー、(5) ヘルス・ボランティアの 1 日、(6) みんなの活動の安全を守るために、の 6 項目であった。

3. ボランティア活動からの学習

履修生が行っているボランティア活動を Web でダイアリーログとして記録し、教員グループに Web で送付した。ダイアリーログには、(1) 実施日時、(2) ボランティア名、(3) 見たこと・行ったこと・経験したこと、(4) 感じたこと・考えたこと、(5) 今後の活動に向けて、(6) 困ったこと・質問の欄があり、その各欄にボランティ

アで経験したことを報告した。学生が質問や返信を希望する場合、連携教員を選び質問できた。教員は、学生の質問やフィードバックの依頼に応じて答え、加えて、学生に必要時ログのフィードバックを返信した。コースの終わりには、サマリーログを作成した。サマリーログでは、(1) 活動の概要と中心課題、(2) 活動の中で驚いたこと、(3) 活動の中で困ったこと、(4) 学びとそれを学びと思えた理由、(5) 今後の課題と展望、の項目で記述し各自の行ってきたボランティア活動の総括報告をした。

4. 全体ミーティングでのボランティア経験の共有と振り返り

学期の前期の修了前と夏休み後、コースの終了時に、履修する学生とミーティングを持ち、直接学生間での意見交換をした。

5. 評価

学生が単位取得するための条件として、学生は、(1) 教員が行うガイダンスを受け、(2) Web でボランティア学習の報告ログを提出し、(3) 無償のボランティア活動に 6 回/18 時間以上、(4) 活動ログ開始時、中間、最終時の 2 回の全体ミーティングに出席すること、とした。ミーティングの日時は、受講生と相談の上決定した。評価方法は、学習・活動ログ (50%)、ミーティング参加度 (30%)、最終ログ (20%) とした。

IV. 結果

1. 履修生の単位修得状況

ガイダンスの後に履修届を提出した学生は2年生が1名、1年生が33名であった。年度が終わり単位修得に至った学生は、2年生が1名、1年生が17名であった。未履修の学生のうち、履修届を出しただけの学生は10名、Web学習報告のみで終わった学生は4名、ボランティアが基準の回数でなかった学生が2名であった。

2. Web学習とその報告

Web学習報告は、計34のログ報告があり、4回報告した学生は3名であり、3回は1名、2回は7名、1回は5名であった。また、2名の学生は、Web学習ログを提出せず、ボランティア活動を開始していた。

Webでボランティアについて学習したログ報告の中で特徴的な報告として、学生はこれまでボランティアの経験があったが、ボランティアについて改めて考えたことがなかったと報告し、今後のボランティア活動での各自の抱負を述べていた。研究協力を承諾した3名の学生のログの一部では、下記のように報告されていた。

学生Aは、「この学習をするまでボランティアとは、他人のために奉仕すること、見返りを求めないこと、と何となく考えていました。しかしボランティアという言葉の語源、定義を学び、ボランティアの原則を図によって分かりやすく学習することで、ボランティアについて知識を深めることができました。……社会の福祉向上はもちろん、自分自身の人生を豊かにし、成長してゆくため、また自己のアイデンティティー確立としてなされること。社会福祉、社会に属する人間、社会を生きる自分のためになされることだと今回の学習を通して感じました。……今後は、暇を見つけて取り組みたい」。

学生Bは、「考えながら行わないと、自己満足で終わってしまったり、逆に相手の迷惑になってしまうと感じました。……今後、さらにボランティア経験を積み、ボランティアに対する自分の考えを持てるようになりたい」と報告していた。

さらに、学生Cは、「ボランティアを円滑に継続していくためには、人手ときちんとした管理体制が必要だと学んだ」と報告している。この学生は今後の活動に向けて、「ボランティアの運営、管理体制、責任といったことにも目を向けたい。これまでのボランティア活動から、ボランティアの継続について考え、いかに自分が続けられるかを考えたい」と報告していた。

3. 学生のボランティア活動と活動報告（デイリーログとサマリーログ）状況

学生18名のうち、13名は複数のボランティア活動を

表1 ボランティア活動内容

学内 サークル	病院	成人病棟	いちごフレンド (15名)
		小児病棟	ナイトフレンド (5名)
	在宅		在宅だいじょう部 (2名)
学内事業	健康情報普及		るかなび (1名)
地 域	施設支援		母親支援 (1名)
			帽子づくり・ケーキ作り (1名)
			児童館(人形劇) (1名)
			老人介護施設 (2名)
	10代性情報普及		ティーンズルーム (2名)
	障害児支援		子どもキャンプ (2名)
海外			マザーテレサ (1名)

していた。活動の内容と人数を表1に示した。大半の学生はサークルを形成している病院内の病棟ボランティアや在宅ケア、地域健康相談活動(るかなび)で1回3時間程度活動していた。その他、地域で支援の必要な子どものキャンプボランティア、母親支援活動、10代の性教育活動、地域の老人介護施設、クリスマスケーキづくりや帽子作りなど福祉施設支援の活動、さらに、夏休みに2週間インドのムンバイでのマザーテレサの施設で活動した。

ボランティアからの学びの報告(デイリーログ)は、計130のログが提出され、平均7ログを提出していた。1名で最多報告は17ログであり、最少報告は2ログであった。その最少の報告は、海外での2週間の報告がサマリーとして報告された。

各人のボランティア活動の経験に基づいたログ報告がされた中で、サマリーログでの特徴的な報告は、ボランティアで出会った対象のとらえ方が変化していることが自分の学びとしてとらえられていた。代表的な本研究の協力を承諾した学生のサマリーログを表で提示する(表2, 3参照)。学生Aは(表2)病棟ボランティア、学生B(表3)は小児病棟ボランティアのサマリーログである。

4. 学生の科目評価

履修生の科目評価は、18名の履修生のうち、13名(73%)から科目の評価を得た。科目の満足度は10点満点で平均8.50点(標準偏差1.168)であった。12領域の4点リッカート尺度での評価で、12項目全体の平均値は3.57点であった。12項目の高く評価された領域は、新しい知見(平均3.92)、学習意欲(平均3.92)、さらに勉強(平均3.69)、積極的参加(平均3.62)、学習目標明確性(平均3.62)であった。低く評価された点は、教材活用(平均3.15)、授業方法(平均3.33)、内容一貫性(平均3.42)、関連学習(平均3.46)であった。

表2 学生Aのサマリーログ

<p>2009年 11月〇日 22時から 24時</p>	<p>いちご フレンド (サマリー ログ)</p>	<p>【活動の概要と中心課題】 10Eフレンドでは、食事の配膳・下膳、洗面の手伝い、薬のチェック、薬剤部へのおつかい、食事摂取量のデータ入力、洗い物などを通して、看護師さんが忙しくて手がまわらないことを私たち学生がお手伝いしています。課題としては、看護師さんから言われなくても自分から仕事を見つけて動けるようになること、そして少し高度な看護技術も少しずつ身につけていくことです。</p>	<p>【活動の中で驚いたこと】 10Eフレンド、ナイトフレンド両方で感じるのですが、本当に様々な患者さんが入院しているということです。病気の程度や年齢、考え方や価値観・本当に様々なのだということを知りました。看護する看護師も同じ人間ですから、同じように価値観や考え方も様々です。病棟は地域と隔離された環境だと思っ ていましたが、病棟も小さな地域なのだとことを思い知らされ、驚きました。</p>	<p>【活動の中で困ったこと】 自分に仕事を頼んでくれた看護師さんが、仕事が終わった後報告しようとしてもどこにいるかわからず、また他の看護師さんに伝えようとしてもその事情をわかっていないので伝えづらい、という状況になることが多く、いつもどうしたらよいのかわからず困ってしまいます。また、接する患者さんの病状がどのようなものなのかという説明をほとんど受けな いため、実際に患者さんと関わる時にどのように接したら良いかわからず、困ってしまう時があります。</p>	<p>【学びと、それを学びと思えた理由】 患者さんそれぞれに個性のある看護を提供することは、授業で何度も聞いてきたことですが、看護援助論?の病棟実習でも実際に感じたことですが、実際に個性のある看護を行うことは簡単なことではないということを実感しました。なぜなら、こちらが個別性に配慮していたとしても、タイミングが合わなかったり、患者さんの好みに合わなかったりするなど、上手くいかないときもあるからです。何度も回数を重ね、工夫に工夫を重ねることで、患者さんとの息も合い、それによって良い看護ができるのではないかと思 います。</p>	<p>【今後の課題と展望】 「こうでなくてはならない」や「これができないといけない」などと、自分に余計な責任感やプレッシャーをかけてしまうことが多いです。その結果、少しでも自分の思うようにいかない、自信を無くしてしまったり、自分のことを過小評価してしま います。まずは自分の出来ているをしっかり認め、あせらずにひとつひとつ成長していけばよいという気持ちを持って、これからのボランティア活動に参加していき たいと思います。</p>
--	---------------------------------------	---	--	---	---	--

表3 学生Bのサマリーログ

<p>2010年 1月〇日 10時から 11時</p>	<p>ナイト フレンド</p>	<p>【活動の概要と中心課題】 <活動の概要> 小児病棟で患児の兄弟や患児たちと一緒に遊んだり、彼らを寝かしつけたりする。 <中心課題> 午後6時～9時まで、という限られた時間の中、病棟という限られた環境の中でいかに子供たちを楽しませ、寝かしつけるか。</p>	<p>【活動の中で驚いたこと】 ・半年以上も入院している患児がいること ・子供たちの成長を見られたこと ・ボランティアは大変だけど、まったく苦に感じず、寧ろ行くのが毎回楽しみであること ・子供たちなりにお互い気遣ったりしていること</p>	<p>【活動の中で困ったこと】 ・遊びに限りが出てしまい、もっと楽しい遊びはないかいつも考える。 ・子供が寝付かないうちに活動時間が終了してしま うときは困る。 ・どんな言葉をかけたらいいかいつも悩む。</p>	<p>【学びと、それを学びと思えた理由】 長期にわたって活動することで子供たちの成長や、特徴がわかってくるので、どう対応するべきかがなんとなくわかってくる。そういった点において自分と相手の成長を感じることができ、大きな学びとなった。</p>	<p>【今後の課題と展望】 ・看護学を学習する中で得た知識とあわせてもっと患児の様子を見て考察することができるようになりたい。 ・活動を継続し、もっと工夫して子供たちに楽しい遊びを提供したい</p>
---	---------------------	--	---	---	--	---

5. 教員体制

本科目は、担当教員1名とe-ラーニング・アシスタント1名、及び3名のアドバイザー教員で構成された。担当教員は、ガイダンス、全体ミーティング及びログのフィードバック、評価を中心的に行った。アドバイザーおよび連携教員3名は、その都度、学生の質問に応えた。18名の学生の質問や返信希望はすべてのログではないため、教員は複数の科目を担当しながら、この新たな科目を負担感なく担当できた。

V. 考察と今後の課題

今後改善する必要があると考えられる課題は大きく3点考えられた。第1に単位を取得した学生の科目評価による満足度は高かったものの、履修生34名のうち18名(53%)が単位取得し、約半数弱の学生が単位取得に至らない履修しやすい科目ではない点、第2に学びの場・環境としてのボランティアの場に関して、第3にログに対してのe-チューターおよび通年3回の全体ミーティングと教員の役割に関して、である。

1. 単位取得の難しさとガイダンスの充実

本科目は、履修届を提出した34名中、10名の学生は、ID登録をしたのみ、2名の学生は数回のログ報告のみで、単位取得の大変難しい科目の一つである。本科目は、能動的にボランティアへ参加し、その活動経験を振り返ることによって学習する科目の性質上、単位取得するための条件は少なくない。単位取得するためには、1) ボランティアについてeラーニングし、2) 学生は能動的にボランティア活動へ参加し、3) 活動を通じてリフレクティブな学習をし、4) その学習をWeb上のログとして作成・送信することができなければならない。加えて、5) 全体ミーティングに参加し、6) 活動サマリーを提出しなければならない。

新入生にとって、参加すべきボランティアを知ることから始まり、Webを使ってのログを提出するスキル獲得までの過程は容易ではないように考えられる。最初のボランティア科目ガイダンスを2~3回計画し、具体的なボランティア活動への参加の仕方や、Web学習スキルを実地で学ぶクラスを計画する必要がある。

2. 学びの場・環境であるボランティアの場の拡大

現在、すでに病院での夕方行うボランティアは定着しつつある。大学保健情報普及施設での“るかなび”等のボランティア活動に参加した学生もいたが、週日の昼間の活動は難しい現実がある。年間で、週末に行われる地域でのるかなびの活動もあるため、事前の情報提供をしつつボランティアの場を広げる必要もある。数少ないが、現在海外でのボランティア活動をしている学生もおり、今後、海外ボランティア活動の場を拡大していく必要がある。

3. チューターリングの課題と今後

デイリーログのフィードバックと合わせて、教員のオフィスアワーを設けて、Web上でのみの関わりでなく、ミーティングの時間を初めからとっておくことは、さら

に学びの機会を増やすために必要と考える。

VI. おわりに

本科目は、未開講の科目、総合科目Ⅲ 生活科学論の枠を使用して開講した。2011年からの新カリキュラムでは、科目名が「ボランティア活動学習」と名称が変更される。ボランティア活動から学ぶ、サービス・ラーニングがこれまでの「生活科学」にそぐわないことはなかったが、2011年度からは、サービス・ラーニングとして、再スタートする。Web-basedのサービス・ラーニング科目として、改善すべき課題はあるが、看護学生が学士として社会の一員としての自覚と責任性を学び、リフレクション・スキルの基礎づくりの学習支援を継続していきたい。さらには、大学院での修士レベルの社会・国際貢献性の学習を基盤とした看護専門職への成長支援へとつなげていきたいと考えている。

引用文献

- 1) 田代順子, 松谷美和子, 他. (2009a). 看護学でのサービス・ラーニングを応用した都市型・社会参加型カリキュラム開発と評価. 平成17年度~平成20年度科学研究費補助金研究成果報告書.
- 2) 田代順子, 長松康子, 松谷美和子, 菱沼典子他. (2009b). Web上でのヘルス・ボランティア学習支援プログラム試用の評価・改善とカリキュラム化. 聖路加看護学会誌. 13(2), 53-62.
- 3) 松谷美和子, 田代順子, 香春知永, 酒井昌子, 他. (2004). 看護教育法としての「サービス・ラーニング」: 実践研究文献レビュー. 聖路加看護大学紀要. No. 30. 31-38.
- 4) Driscoll, J. (Ed.). (2007). *Practicing Clinical Supervision: A Reflective Approach for Healthcare Professionals*. Bailliere Tindall, Elsevier, Edinburgh, UK.